

新しいイチジク株枯病抵抗性台木「励広台 1 号」

○上森真広、磯部武志（食と農の研究部）

[共同研究機関：農研機構果樹研究所、広島県、福岡県]

1. 背景と目的

イチジク株枯病（病原菌 *C. ficicola*、以下、株枯病）は、イチジクにおいて最も深刻な土壌病害である。防除方法として殺菌剤の土壌灌注処理があるが、多くの労力や経費を要するため、抵抗性台木の開発が強く求められてきた。

一方、日本在来のイチジク属野生種であるイヌビワは株枯病に極めて強い抵抗性をもつ。しかし、イヌビワはイチジクと接ぎ木親和性がないため台木として利用できなかった。そこで、イヌビワとイチジクの種間交雑からイヌビワと同程度の株枯病抵抗性を有し、イチジクと接ぎ木親和性のある「励広台 1 号」が農研機構と広島県により育成された。当所では、日本の主要品種で大阪府の生産量の約 9 割を占める「榊井ドーフィン」を「励広台 1 号」に接いだ接ぎ木樹（以下、「励広台 1 号」台樹）の栽培特性を把握した。

2. 調査方法と結果概要

(1) 「励広台 1 号」台樹の生育および果実品質

「励広台 1 号」台樹は順調に生育し、樹あたりの果実収量（8 月～10 月）は、定植 2 年目は 27.6 kg/樹、定植 3 年目で 35.1 kg/樹、定植 4 年目で 44.1 kg/樹となり、定植 3 年目から大阪府経営指標（2017）の収量 30.5 kg/樹を上回った。また、「励広台 1 号」台樹の果実品質は、「榊井ドーフィン」自根樹とほぼ同等であった。

(2) 「励広台 1 号」台樹の株枯病抵抗性

ポットに定植した試験樹に株枯病菌を土壌接種したところ、「榊井ドーフィン」自根樹が株枯病で枯死する条件下においても、「励広台 1 号」台樹は枯死せず、生育や果実品質への悪影響は全くみられなかった。

以上から、「励広台 1 号」は株枯病に対してイヌビワと同等の強い抵抗性をもつことがわかった。また、「励広台 1 号」台樹の生育および果実品質は「榊井ドーフィン」自根樹と同等であった。そのため、「励広台 1 号」の利用は、株枯病対策として非常に有効と期待できる。

3. 今後の方向性

共同研究機関と研究成果をとりまとめた栽培手引書（新たな株枯病抵抗性台木品種「励広台 1 号」を活用したイチジク栽培手引書）を作成した。この手引書を用いて、「励広台 1 号」台樹の導入を検討している府内イチジク生産者への情報提供を実施する。また、所内に新たに「励広台 1 号」台樹を定植し、生産者が見学できる展示園を整備する。

業績

- (1) Kamimori, M., Isobe, T. and Yakushiji, Y. (2022) Evaluation of Ceratocystis Canker Resistance, Vegetative Growth, and Fruit Production of ‘Masui Dauphine’ Fig (*Ficus carica*) Grafted on ‘Reikodai 1 go’ BC₁ of an Interspecific Hybridization of *F. carica* and *F. erecta*. Hort. J, 91(3), 337-344. DOI : <https://doi.org/10.2503/hortj.UTD-358>

生研支援センター「イノベーション創出強化推進事業（課題番号：29029C）」の支援を受けて、本研究を実施した。